

倉吉未来中心大ホールリニューアル記念

日本海新聞発刊45周年記念事業

野村万作



野村万作・萬斎

狂言会

演目

萩大名

はぎだいみょう

三番叟

さんばそう

2021年 12月23日(木)

開演19:00(開場18:15/終演予定20:40)

倉吉未来中心大ホール

(倉吉市駄経寺町212-5)



撮影:政川慎治

野村萬斎

【大切なお願い】
新型コロナウイルス感染症拡大防止
対策を講じての開催となります。
様々な制限や対策へのご理解、ご協
力をお願いいたします。

詳しくはコチラ



料金 / S席7,000円 A席5,500円(全席指定・税込) ・当日は500円増
・未就学のお子様の入場はご遠慮ください

プレイガイド / 日本海新聞各本社、とりぎん文化会館、倉吉未来中心、アルテプラザ(米子駅前ショッピングセンター4階)
日本海新聞オンラインチケット、WEBチケとっとり、ローソンチケット(Lコード61393)

一般発売=10月22日(金)10:00

野村万作・萬斎狂言会

令和三年十二月二十三日(木)午後七時開演
倉吉未来中心 大ホール

三番叟

千歳 石田淡朗
三番叟 野村萬斎

大鼓 原岡一之

脇鼓 田邊恭資

小鼓 頭取 鶴澤洋太郎

脇鼓 飯富孔明

笛 松田弘之

解説

休憩

後見 深田博治
高野和憲

高野和憲

萩大名

狂言

大名 野村万作

太郎冠者 中村修一

亭主 深田博治

後見 飯田 豪

野村万作

(のむらまんざく)



1931年生。重要無形文化財各個指定保持者(人間国宝)、文化功労者。祖父・故初世野村萬斎及び父・故六世野村万蔵に師事。3歳で初舞台。早稲田大学文学部卒業。「万作の会」主宰。

軽妙洒脱かつ緻密な表現のなかに深い情感を湛える、品格ある芸は、狂言の一つの頂点を感じさせる。国内外で狂言普及に貢献。ハワイ大・ワシントン大では客員教授を務める。狂言の技術の粋が尽くされる秘曲『釣狐』に長年取り組み、その演技で芸術祭大賞を受賞。その他、紀伊國屋演劇賞、日本芸術院賞、松尾芸能賞、紫綬褒章、坪内逍遙大賞、ベストファーザー賞、朝日賞、旭日小綬章、中日文化賞、ニューヨーク・ジャパソサエティ賞等、受賞歴多数。02年早稲田大学芸術功労者として表彰を受ける。08年練馬区名誉区民。『月に憑かれたピエロ』『子午線の祀り』『秋江』『法螺寺』『敦一山月記・名人伝一』等、狂言師として新たな試みにもしばしば取り組み、現在に至る狂言隆盛の礎を築く。後進の指導にも尽力。著書に『太郎冠者を生きる』(白水社uブックス)、『狂言三人三様・野村万作の巻』(岩波書店)、『狂言を生きる』(朝日出版社)など。練馬文化センター名誉館長。

野村萬斎

(のむらまんざい)



1966年生。祖父・故六世野村万蔵及び父・野村万作に師事。重要無形文化財総合指定者。3歳で初舞台。東京芸術大学音楽学部卒業。「狂言ござる乃座」主宰。

国内外で多数の狂言・能公演に参加、普及に貢献する一方、現代劇や映画・テレビドラマの主演、舞台『敦一山月記・名人伝一』『国盗人』『子午線の祀り』など古典の技法を駆使した作品の演出、NHK『にほんごであそぼ』に出演するなど幅広く活躍。各分野で非凡さを発揮し、狂言の認知度向上に大きく貢献。現代に生きる狂言師として、あらゆる活動を通して狂言の在り方を問うている。94年に文化庁芸術家在外研修制度により渡英。芸術祭新人賞・優秀賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞、毎日芸術賞千田是也賞等受賞多数。著書に『萬斎でござる』『MANSAI◎解体新書』(朝日新聞出版)、『狂言サイボーグ』(日本経済新聞社/文春文庫)等がある。世田谷パブリックシアター芸術監督。東京2020組織委員会アドバイザー。21年4月より石川県立音楽堂邦楽監督、同6月より全国公立文化施設協会会長。

三番叟

(さんばそう)

能楽の儀礼曲「翁」の中で、狂言師の勤める役が「三番叟」です。常の能とも狂言とも違う、古風な様式を多く留めた神聖な曲とされ、現在でも、正月の初会や舞台披露、特別な記念の催しなどで演じられます。三番叟の舞は足拍子が多いため、三番叟を「踏む」という表現も使われます。足拍子は大地を踏み固める所作に通じるため、天下泰平を祈る翁の舞に対し、三番叟は五穀豊穡を寿ぐ舞と考えられています。まさに日本芸能の真髄というに相応しい、格式とダイナミックな躍動感を合わせ持つ舞です。

演目紹介

萩大名

(はぎだいみょう)

近々都から帰国することになった田舎大名が、太郎冠者の案内で、とある庭園に萩の花見に出かける。風流者の亭主が、来客に必ず一首所望することを知っている太郎冠者は、「七重八重 九重とこそ思ひしに 十重咲きいづる 萩の花かな」という聞き覚えの歌を大名に教えておく。見事な庭を楽しんだ後、いよいよ歌を詠むことになるが、大名は…。

秋の風情豊かな庭を舞台に、豪快な大名と繊細な和歌の世界のギャップが笑いを誘います。三人の軽妙なやりとりをごゆっくりお楽しみください。